

(書評) トゥールの戦と白村江の戦

〔書評〕

トゥールの戦と白村江の戦

―夜久正雄著「白村江の戦」を読み―

下 島 連

近代西欧の地理的範囲をほぼ決定した決定的な戦闘は西紀七三二年のトゥールの戦である。

それはラインを渡河してゴールの地に入り、なかばキリスト教化していたフランク族とピレネー山脈を越えてイベリア半島から侵入してきたイスラム教徒アラブ族との、西ヨーロッパにおけるローマ帝国領争奪の決戦である。

この戦闘の前夜には、十字架が勝って西ヨーロッパが将来キリスト教世界になるか、はたまた三日月が勝って西ヨーロッパの地がイスラム教世界に属すること

になるかは何人にも予想できなかった。始めから勝敗の帰趨がはっきりしている戦というものはあり得ないからである。

私達は西ヨーロッパがキリスト教世界になったのは自然のなりゆきであったかのように思いがちであるが、決してそうではなく、その前にイスラム世界との決死的格闘があったことを想起しなければならない。棚からボタ餅は歴史の常軌ではないのである。

西紀六三二年にアラブの宗教的、軍事的天才モハメットが没したが、次の百年間にアラビア半島から爆発

したイスラム教徒アラブ族の領域は、東はササン帝国を亡ぼしてエウラシア・ステップの中心部に近いオクサス・ヤクサルテス流域に達し、西はシリア、エジプト、北西アフリカ（いずれもかつてのローマ帝国の領土であつた）を征服し西ゴート族の内紛に乗じてジブラルタル海峡を渡つてイベリア半島におよんだ。

七二九年にエジプト、西アフリカでの戦闘で拔群の武勲をあらわしたアブダラーマン・イブン・アブディラがイベリア半島の総督に任命された。彼はピレネー山脈の彼方にひろがる、かつてのローマ領征服の機会をうかがい、北アフリカからベルベル族騎兵隊を移駐させるなど着々戦備をととのえ、七三二年に八万の軍勢（この数字はアラブ側のもの、キリスト教徒年代記作者の数字は数十万）をひきいてピレネーを越え、たちまちナルボンヌ、トゥールーズ、ボルドーを陥れ、さらにロワール川に沿つてトゥールに進撃する態勢を見せた。

この知らせは現在の西ヨーロッパの天地を文字通り震撼させた。危機に際して英傑が出現するのはよくあることで、この時フランク族の勇将シャルル・マルテルが奮起してキリスト教世界を救つた。

フランク族の精鋭とアラブ族の精鋭はトゥールの野で激突した。そして勝利の栄冠はフランク族の頭上にかがやいて、その後のヨーロッパの歴史の流れを決定することになった。

それ故に、フリードリヒ・シュレーゲルは「カルル・マルテルの軍隊はすべてを破壊するイスラム教徒から西欧キリスト教徒を救つた」と述べてこの勝利に感謝している。またレオポルド・ランケは次のように分析している。「八世紀の前半は世界史のなかで最も重要な時代の一つである。その時、イスラム教徒はゴールの地およびイタリアに拡大する勢いを示した……このキリスト教徒社会の危機に際してゲルマンの若きプリンス、カルル・マルテルはキリストの戦士として奮起

し、キリスト教徒を防衛し、キリスト教会のために新しい領域を手に入れた。」

またギボンは『ローマ帝国衰亡史』のなかで、「この時サラセンを阻止することができなかったならば、オックスフォード大学では今ごろコーランの解釈が教えられているであろう」と書いている。すなわちこの戦に敗れたならば、西ヨーロッパはキリスト教世界ではなく、イスラム教世界になっていたかも知れないとギボンは示唆しているのである。

地図の上でトゥールを見るがよい。トゥールはピレネー山脈を去ることはるかに遠く、殆んど現在のフランスの中央部に近いところに位置していることを思うと、ギボンの仮定は全く根拠のない妄想ではないことが納得されるであろう。

こうして、西紀七三二年のトゥールの戦闘に勝つことによって、西欧世界はイスラム世界に組み入れられることをまぬがれた。そして、現在の西欧世界の領域

のなかで近世西欧諸国がその後徐々にはっきりした形態をあらわすことになった。

夜久教授の『白村江の戦』を読んでエドワード・クリシー（一八一二—一八七八年）の名著「世界の十五大決戦」The Fifteen Decisive Battles of the Worldのなかの「トゥールの戦」の章を思い出した。七世紀に戦われた白村江の戦が東アジアの歴史のなかで、西欧史における八世紀のトゥールの戦に劣らない決定的な歴史の意味をもつ戦闘であることを夜久教授の新著によって深く納得したからであろう。

夜久教授はこの本のなかで、日本・百濟軍と唐・新羅軍との間で戦われた白村江の戦を中心とする七世紀の動乱がその後の東アジアの国際関係の形態を決定したと論断し、かつそのことを強い説得力をもって立証している。これは本書の最大の功績であろう。

われわれは東アジアの地に中国、朝鮮（今は二つの国に分れているが、やがて統一されるであろう）、日本

という三つの国家の存在を認めるが、この基本構造が、いつ、いかにして出現したかについて必ずしも明確な認識を持っていなかったように思う。八世紀が西欧社会にとって重大な時代であるとするならば、東アジアでは七世紀が決定的な時代であることを本書の著者によって明確に教えられて、評者は非常にありがたく思っている。

しかし、この本について、このほかにもっと多くのことを語りたい。本を読んで、その本について語りたいたことがたくさんあるということは、その本がすぐれていることの証拠であると私は思っている。

書物のよし、あしを決定する客観的なものさしがあるかも知れないが、私個人としては、それを読んで何らかの刺激と感動——知的な刺激と感動および情緒的な刺激と感動——をおぼえる本がいい本で、そうでない本はつまらない本であると心にきめている。この意味で夜久教授のこの本はまさに名著と呼ぶにふさわし

い本当の名著である。

まず本書成立の動機から始めよう。

日本古代文学を専門分野として堅固な学風を確立していられる著者は、「古事記」や「日本書紀」に精通していられる。従って著者は持統天皇の四年（西紀六九〇）に大伴部博麻なる人物に左のような詔（みことり）がくだったことをかねてからよく承知していた。

『斉明天皇の七年（西紀六六一）百濟を救う戦役（白村江の戦）』に出征した博麻は唐の軍隊によって捕虜にされた。その翌々年天智天皇の三年におよんで土師連・富杼、氷連・老、筑紫の君・薩於麻、弓削連・元宝の子の四人が唐の日本に対する計略を知って、それを日本の朝廷に報告したいと思った。その時、大伴部博麻が土師富杼たちに語っているには『私は君たちと一緒に日本に帰りたいと思うが衣糧がないので一緒に帰ることはできない。どうか私を奴隷に売って君たちの

帰国のための衣食の費用にあててくれ』と。かくて富杼たちは博麻の計略にしたがつて帰国し、唐の軍略を天朝に通報することができた。

汝はその後ひとり他国に留った。今に三十年である。朕は汝が朝廷を尊び、国家を愛して自分の身を売ってまで忠誠心を実行したことをうれしく思うと仰せられて博麻に数々の恩賞をたまわった。」

たまたま昭和三十年頃、南の島からの思いもかけぬ帰還兵があったという新聞記事を見て千数百年をへだてる大伴部博麻のことが著者の脳裡にひらめいた。歴史のなかに現代が生き現代のなかに歴史が生きていることを著者の詩魂はこの瞬間に直観した。

これが本書を書くのに必要な研究に取り組む動機であると著者は述べている。言いかえればその瞬間に著者は本書のテーマをつかんだのだ、いやテーマをつかんだというのは適切ではない。著者の心のなかでテーマが結晶したと言うべきであろう。つかむと言ってし

まえばテーマが外からやって来ることになり結晶したといえば、著者の脳裡に前から漠然と存在していたものが外部的刺激によって結晶体のように瞬間的に形をととのえることを意味するからである。

そして著者はその時から博麻が捕虜になった白村江の戦を、現存するすべての資料——日本、三韓、唐の——によって徹底的に調べ上げることに着手した。

また著者は現地旅行をおこない百済や新羅の遺跡を訪れ、白村江の地に立って往古を懷顧した。

「朝鮮半島の北から満州、北支那、蒙古へ、あるいは海を渡って山東半島、黄河流域の洛陽、長安へと唐軍の行動をたどるうちに七世紀東アジアの世界がひろびろとひらけてきて、目のさめるような感動があった。」
「うれしかったのは、これを書いているうちに目がひらけアジアの歴史と世界が見えてきたことである。」

これは未知の世界を探検する学徒のすばらしい体験ではないか。研究者が知識の領域を開拓し、押しひろ

げ、発見し、確認するよろこびがここに卒直に語られている。そして、これらの言葉は本書が世に多くある乾燥した史書ではなく、血の通った史書として誕生することを約束しているように思う。

夜久教授がとりあげた「白村江の戦」というテーマは雄大なテーマである。その正体は百済を支援する日本の水軍と新羅と結んだ唐の水軍が白村江において激突したのだから日唐戦争と呼んでさしつかえない海戦であった。従って著者の視界は日本と鮮朝半島に限定されないで、当時の東アジアの世界国家であった隋朝や唐朝の首都にまでひろがることは必至であった。

著者は現存するこの戦闘や当時の外交関係に関する日本、朝鮮、隋、唐の資料——それは本書の始めのほうに列挙されている——を渉猟し、断片的な記述を比較整理して整然たる作品に仕上げた。これはなみたいの力倆ではかなわない大仕事であるが、著者の力倆はよくこの大事業にたえた。

著者がこの戦闘をドラマとしてとらえ、ドラマとして描くことを構想したであろうことは、巻頭に収められている登場人物の紹介ならびに主要舞台という言葉によって示されている。これは読者に対する親切な配慮として受け取ることもできるが、もっと積極的な意図、すなわち本書をドラマとして構成しようという意図のあらわれではないかと推測される。

評者自身は構成のみごとな作品を好むものである。対立する勢力の抗争を描く以上、戦史は当然ドラマでなければならぬ。そして、ドラマとして構成するためには著者は史実を自家葉籠中のものとしつつ、自分の観点によって分析し、且つ全体的な統一を与えなければならぬ。こうした見地から見るとき、本書はまことにみごとに構成されていて、構成美をさえ見せている近來まれな史書である、ということが出来る。

「トゥールの戦」においてクリーシーは二つの勢力の抗争を描いているのに対し「白村江の戦」で夜久教授は

日本・百済、高句麗、新羅・(隋)・唐という五つの当事者の抗争、結盟関係を分析して、それを再構成しなければならなかったのだからそれだけ苦心も大きかったであろう。

本書は日本から見た前史、隋唐の東アジア進攻、百済の滅亡、白村江の海戦、戦後という五つの章から成っている。また本書で扱われている重要事件を年代順に見ると、聖徳太子の遣隋使・日本の独立宣言(西紀六〇七年)、大化の改新(六四五年)、百済滅亡(六六〇年)、白村江の戦(六六三年)、壬申の乱(六七二年)、新羅による朝鮮半島の統一と独立(六七五年)、粟田真人遣唐使(七〇二年)ということになる。最後の粟田遣唐使は日唐間の対等な関係における平和克復を意味している。そして白村江の敗戦の結果、日本は長く朝鮮半島から手をひき、壬申の乱を経て独立国家の威力をまじつつ天平文化の開花へとつながってゆく。また朝鮮半島を統一した新羅は唐朝と抗争して独立を実現する。こ

うして現在東アジアの地に存在する国際関係の原型はこの紀元七世紀の動乱を経て実現したことを本書はあざやかに立証している。

本書はまことに興味津々、ゆたかな内容をそなえているので心ある人々にはこのまれに見る史書をひもとかれて七世紀における東アジアの苦悩と栄光にふれられんことを切望する。かならずや東アジアの歴史について目がひらけたという著者の感動的な体験にあずかることができるであろう。

終りに特に気づいた二、三の点にふれておきたい。

さきに評者は本書の構成のみごとさについて述べたが文章の美しさについても読者の注意をうながしておきたい。文章は書物全体の単位であるから書物を美しく構成するための最も基本的な要素は一つ一つの文章の美しさである。明晰にして清潔その進行がなだらかで、すこしもむだのない文章、そっけないほどむだのない正確な文章の美しさを私はこの本に見出した。ま

た万葉集などから引用されている多くの和歌についての著者の考証、解釈、鑑賞の安定感はずがであるというほかはない。

国を愛すること切なる大伴部博麻なる人物を現代に呼びもどしてくださった著者に感謝する。また日本と唐の首都に滞在して快活な談論で両国の宮廷人をひきつけた金春秋、のちの新羅の武烈王、モンゴル系契苾部の酋長の子として生まれ、のちに將軍として唐朝に仕えた契苾加力などは特に忘れがたい人物である。契苾加力によってアジア大陸の奥地にひろがる世界国家のにおいが伝わって来るような気がする。また「隋書」の執筆者でもある唐の名臣魏徵のプロフィールも忘れがたいものがある。

最後に夜久教授は東アジア史における満州の地位を問題点として提起してられるが、評者の知るかぎりアーノルド・トインビーは満州の地をエウラシア・ステップの東端と考えてステップの住民である遊牧民と

近接する定住社会もしくは文明社会との関係という観点から満州やモンゴリアの歴史的地位をとらえていることを付記し、著者の労に敬意を表し拙稿を結ぶ。

アジア研究所報

研究所設立までの経過報告

亜細亜大学はその名称の示すように、大学の前身校を含め一九四一年の創立以来、「日本および亜細亜の文化社会の研究と建設的实践に重点を置き、亜細亜融合に新機軸を打ち出す人材の養成」を使命としてきた。事実、戦前、戦中を通して、時の政治のいかんにかかわらず、本学の出身者は若い情熱を燃焼し、遠くモンゴルの奥地から、南溟の果てに至るまで、眞の意味におけるアジア諸民族の融合のために渾身の努力を傾け尽してきた。

一九四五年、第二次世界大戦の終

焉とともに、日本は第二の鎖国のような状態を余儀無くさせられ、本学もまた国内経済人の養成をはかり、日本そのものの復興に主力を注いできた。しかし、この間にあつても、建学の使命は忘れられたのではなく、アジア研究の講座をカリキュラム内に組みこみ、あるいは、戦後の日本のさきがけをきつて一九五四年には、多数の留学生を東南アジアより受け入れる等、常にアジアへの志向の姿勢を堅持し続けてきた。

その後、日本の復興、発展に伴い、「亜細亜大学がアジア研究のセンターに」との声は教職員、学生の間におこり、一九六一年には、亜細亜大学教養部有志教員の間に、「アジア

文化研究会」が生まれ、学生もまた多くのアジア研究のためのクラブを結成した。

一九六八年、大学内に将来、アジア研究機関を設立するための調査機関として全学的な「アジア研究センター」(略称ARC)の設立をみた。ARCは乏しい予算の中から、資料の収集、研究会の開催、調査等を通じて、以来五年間これを続行してきた。

一九七三年六月五日、アジア研究センターは改組され、正式な大学の付属機関「アジア研究所」として誕生した。初代所長に教養部筑紫平蔵教授が任命された。そして別記のように規約、運営委員、所員の研究テーマ等、組織作りが始められ、同時に資料の収集、研究会の開催等が行なわれた。

以上が設立に至るまでの経過である。本研究所は大学内の一研究所であるが、以上の意味からみて、大学

の建学の使命を担った研究所といふことができる。

アジア研究所規定

施行 昭・48・6・5
変更 昭・49・5・23

第1条 本研究所は、亜細亜大学ア

シア研究所 (The Institute
for Asian Studies—Asia
University) と称し、亜細
亜大学に付置する。

第2条 本研究所は、アジアに関す
る総合的な調査・研究を行な
うことを目的とする。

第3条 本研究所は、前条の目的を
達成するために、次の事業を
行なう。

- (1) 調査・研究の実施
- (2) 機関誌および研究成果等
の刊行

(3) 資料の収集・整理および
保管

(4) 研究会・講演会および
講習会等の開催

(5) 内外調査研究機関との研
究上の交流

(6) 学生の研究活動に対する
助言および指導

(7) その他必要と認める事業

第4条 本研究所に次の職員を置く。

(1) 所長 一名

(2) 研究員 若干名

(3) 研究補助員 若干名

(4) 事務員 若干名

2、研究員・研究補助員および

事務員は、学校法人亜細亜学
園の職員でなければならぬ。

3、以上の他に、事業計画の実
施上必要と認められる時は、

臨時に嘱託研究員を置き、調
査・研究等に参加させること
ができる。

第5条 本研究所構成員の任免は、
次のように行なう。

2、所長は運営委員会の推薦に
もつぎ、研究員総会の承認
を得て学長が任命する。

3、所長の任期は2年とする。
ただし、再任を妨げない。

4、研究員および研究補助員は、
運営委員会の承認を得て学長
が委嘱する。

5、嘱託研究員は、運営委員会
の承認を得て、所長が委嘱す
る。

第6条 本研究所に顧問を置くこと
ができる。

2、顧問は運営委員会の推薦に
もつぎ、研究員総会の承認
を得て、学長が委嘱する。

第7条 所長は、研究所の業務を統
括し本研究所を代表する。

2、研究員は、所定の調査・研
究に従事する。

3、研究補助員は、所定の調査・研究を補助する。

4、事務員は、研究所の事務に従事する。

第8条 本研究所に運営委員会（以下委員会という）を置く。

2、運営委員は、研究員総会において選任し、学長が委嘱する。

3、運営委員の定員は15名以内とし、任期は2年とする。

ただし、再任を妨げない。

第9条 委員会は、所長がこれを招集し、次の事項を審議する。

(1) 事業計画および研究所の運営に関する事項

(2) 研究所の予算・決算に関する事項

(3) 本規程の改廃に関する事項

(4) その他、所長から付議された事項

第10条 前条第1・第2および第3

号の決定は、研究員総会の承認を得て、学長の承認を得るものとする。

第11条 本研究所は、年に一回研究員総会を開催する。

ただし、所長が必要と認めた場合は、臨時総会を開催することができる。

2、総会は、研究員の3分の2以上の出席を以て成立し、議決は出席者の過半数によるものとする。

付 則

この規程は、昭和四九年五月二二日から実施する。

研究員および研究テーマ一覧

研究員 研究テーマ

浅見 方舟 アジアにおける英語普及の実態調査

稲葉 昌幸 インドネシア、マレーシアにおける村落共同体（デサ）の研究

小田村寅二郎 西アジア諸国との国際関係について

王 瑜 東南アジアにおける華僑事情

梶村 昇 東南アジアにおける異宗教交流史

神沢 有三 モンゴルの農業経済

倉岡 克行 東南アジアの華僑

小牧 昌実 アジアの芸能

武部 啓 アジアの民族・人口・優生問題

筑紫 平蔵 日本とアジア諸国との文化、思想・経済交流

史		服部 正中		国際経営比較		済開発の研究	
寺田 剛	台湾の孔子廟研究			―東南アジアの経営環境―		(2)ソ連のアジア政策の研究	
中里 良男	東西比較思想	馬場 房子		「働く人々の職務満足感」に関する調査・研究	加藤 寿延	アジア諸国の社会経済発展と人口	
斐 徳煥	「三国遺事」の研究並びに日本口語訳						
夜久 正雄	白村江の戦役(日唐戦争)史	楊 天溢		(1)アジアの経済発展と企業者活動	渡辺與五郎	東南アジア経済史	
				(2)アジアの企業風土と経営	菊池 威	発展途上国の税制および財政一般	
水野 建雄	―東アジア国際関係の史的研究―			開発過程におけるコミユニティーの構造と変容	大平 善梧	国際関係の方法論について	
宮田 斎門	東西比較思想研究	飯島 正			清瀬信次郎	アジア諸国における商法比較研究	
安念 一郎	中国の漢方医学について				工藤 重忠	中華民国の五権分立	
倉前 義男	中国の古典京劇について	板垣 與一		東南アジアのナショナルリズムと経済発展との基本的関係	西俣 昭雄	―特に監察院制の歴史と現実―	
進藤 義彦	シベリア開発と中ソ関係					東洋の移民のラテンアメリカ諸国に与えた文化的影響	
	(1)古代日本海沿岸における鉄器文化	玉置 正美		―方法論的研究を中心として―		アジアの家族について	
	(2)ソ連邦小学校歴史教育			アジアの工業化と日本の役割	三村芙美子	アジア経済の計量分析	
張 祥義	東南アジア華人史研究	福島 康治		アジア諸国の経済発展と金融	稲田 光治	東南アジア諸国及び中国の流通構造	
奥田 孝一	アジア諸国の証券市場に関する研究	丸毛 忍		(1)ソ連領極東シベリアおよび中央アジアの経済	大江 宏		
					小倉 幸義	三菱の海外進出	

嘱託研究員

伊藤六十次郎 日本の東亜政策と満

州問題

片岡 浩 (1) 発展途上国経済の共

同体論的アプローチ

(2) 多国籍企業とアジア

諸国の国民経済の対応

モンゴル族の古典文化

と宗教

小林 熙直 (1) 中国と中東

―貿易構造と経済援助―

(2) 中国における人民公

社発展の過程

(3) 中国における農業基

礎論

島田 輝男 ネパールの農業開発

(在ネパール)

中下 正治 (1) 清末民初の思想史

(2) 明治以降中国新聞史

一九七四年度活動報告

一 五月一日、筑紫平蔵所長の定年退任に伴い梶村昇教授が所長に任命された。

二 海外実地調査研究はつぎのように実施した。

〈共同研究〉

研究者…夜久正雄教授・斐徳煥教授

研究テーマ…百済王都扶余及び

白村江海戦の史蹟調査

調査地…韓国 調査期間…一

月二三日―一二月一日

〈個人研究〉

1 研究者…寺田 剛教授

研究テーマ…台湾孔子廟研究

調査地…中華民国台湾省 調査

期間…七月二六日―八月一〇日

2 研究者…楊 天溢教授

研究テーマ…「東南アジアにおける企業者活動」の態様と特質について

調査地…ベトナム・タイ・シンガポール・インドネシア・フィリピン

調査期間…九月一〇日―九月二十八日

三 アジア研究所特別講座をつぎのように開催した。

第一回 五月四日・一日

講師…東洋文庫専務理事・東京

大学名誉教授・文学博士

榎 一雄氏

テーマ…日本における東西交渉

史の研究について

第二回 五月一八日・二十五日

講師…教育研究所々長・文学博

士 戸田義雄氏

テーマ…日本宗教の地球史的考

察

第三回 六月四日(教養部の国際

環境論講座との共催)

講師…東京大学教授 衛藤藩吉

氏

テーマ…冷戦から平和共存へ

第四回 六月八日・一五日

講師…東京大学名誉教授・文学

博士 宇野精一氏

テーマ…批林批孔問題を中心に

して

第五回 六月二〇日

講師…文学博士 李 猷璋氏

テーマ…日本における中国学

第六回 十一月一四日

講師…アジア経済研究所主任調

査研究員 高橋 保氏

テーマ…変容するインドシナ諸

国の政治社会構造

第七回 十一月二八日・一二月五

日

講師…一橋大学教授・経済学博

士 石川 滋氏

テーマ…市場経済の発達とコミ

ユニティ

―開発理論の残された

課題―

研究所職員

所長

顧問

梶村 昇教授

板垣與一教授

大平善梧教授

筑紫平藏前所長

運営委員

神沢有三教授

進藤義彦講師

楊 天濫教授

飯島 正教授

玉置正美教授

福島康治教授

清瀬信次郎教授

工藤重忠教授

西俣昭雄教授

稲田光治講師

常任研究員

張 祥義講師

執筆者紹介

板垣與一(本学経済学部教授 経

済政策論文専攻)

楊 天濫(本学経営学部教授 経

営史専攻)

安念一郎(本学教養部講師 中国

文学専攻)

寺田 剛(本学教養部教授 東洋

史専攻)

斐 徳煥(本学教養部客員教授

英文学専攻)

梶村 昇(本学教養部教授 宗教

学専攻)

夜久正雄(本学教養部教授 日本

文学専攻)

下島 連(本学教養部教授 英米

文学専攻)

訃報

室谷賢治郎先生（経営学部教授・本

研究所研究員）は、心不全のため一

月三日午前二時に逝去されました。

ここに慎しんで哀悼の意を表し、

ご冥福をお祈り申し上げます。

…一編集後記…

紀要の発行は一九七三年、本研究所の設立と同時に計画されたが、十分な準備も整わず、七四年度にもちこされ、五月に原稿依頼をしながらも、ご多忙な先生が多く、また誠に悲しいことであるが、原稿を依頼していた室谷賢治郎教授がご病気になられ、その後訃報に接する等のこと

があり、ついに年度末に至って漸く発刊の運びとなった。ご了承を乞う次第である。

しかし太田耕造学長のご寄稿も得、アジア諸国に対する日本の姿勢、ひいては本研究所の将来にわたるあり方を明示していただいたことは幸いであった。室谷教授のご逝去に伴い、社会科学関係の論稿が少なくなったことは残念であるが、板垣與一教授の学際的研究のご労作と楊天濫教授の現地調査を踏まえた八十枚におよぶ論稿を得たことによってそれを補うことができた。

中国関係としては、多年にわたって京劇の研究に従事されてこられた安念一郎講師の、日本でも数少ない京劇の研究、また、すでに十回にわたる現地調査を経られた寺田剛教授の台湾孔子廟の史料の二篇を得ることができた。

また、今回は「韓国特集」と名付

けてもよいほど韓国関係が多かった。斐徳煥教授の「三国遺事」の口語訳は従来なされていなければならぬものであるにもかかわらず、誰も手を付けることのできなかったものであり、貴重な本邦初訳といえるものであろう。梶村昇教授・夜久正雄教授の「百済の古都と戦蹟をたづねて」は、学術研究誌としては珍らしい紀行文的なものであるが、内容は研究調査報告の一部である。堅苦しい学術誌という従来の慣行を破る意味においても意義あるものと思われる。夜久正雄教授の「白村江の戦史料摘要」は七世紀東南アジアの国際関係を知る基本的史料である。下島連教授の書評は、書評とはいいながら一つの東西比較文明論ともいえるものなので、同教授の了解を得て題名をつけさせていただき、書評を副題とした。第二号は年内に発刊したいと編集委員会では考えている。（K）